
怨情

勝目博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怨情

【Zマーク】

Z7961D

【作者名】

勝田博

【あらすじ】

夢の美大に進学した弘子。その弘子に迫る甘い罠……。

序章

序章

一

弘子の日課は朝の入浴から始まつた。温めの湯で、ゆっくりとした至福の時間を過ごす。

最後は、なみなみと湯を満たした浴槽に頭まで沈み込み、息が続くまで数を数え、

一気に立ち上がる。髪の毛から、そして全身からしたたる水滴に意識を集中するのだ。

全身がくすぐられているようで不思議な感覚を体験できる。

厳格な父に育てられた一人娘が、一人の生活を始めて、やっと掴んだ自由だった。

本来ならば、地元の女子大にエスカレータ式に入学できたが、

弘子の願いは、美術大学に行く事だつた。もちろん父は猛反対した。今さら苦労する必要はない、と思つていたからだ。しかし、弘子は諦めなかつた。

このとき初めて弘子は父に反抗した。初めて反抗された父の怒りは凄まじかつたが、

同時に弘子の固い決心も確実に伝わつていた。

結局は父が折れ、美大の受験に同意してくれた。

父は、弘子が受かるとは思つていなかつたのだ。自分の家系にも、弘子の母の家系にも、芸術家は一人もいない。ところが弘子は見事に合格した。

しかも、かなりの成績を収めたようだ。父は戸惑つたが、約束を交わした以上反故には出来ず、弘子が東京の美大にいくことを渋々了解した。

弘子は念願の美大生になれたことを心から喜び、卒業したら必ず帰ると、

父と約束を交わし東京に旅立つた。しかし、その約束が守られることは、永遠に無かつた。

弘子が美大生になつて一年が過ぎよつとしていた。専攻は油絵とデッサンである。

きりりと引き締まつた眉は、被写体に視線が注がれるたびに優しく持ち上がる。

二重まぶたは深く切り込み、やや切れ長の目を形度つていた。鼻はあまり高くは無いが、真っ直ぐに筋が通り、小鼻は小さく適度なふくらみを持っていた。唇は上部がやや上向き、口紅が無くても色気が漂つていた。要は美人なのである。

しかし、弘子にはそんな自覚が無かつた。自分が美人だとは考えたことも無いのだ。

地方の女子高だったこともあり、ボーイフレンドが出来たこともなく、

まして男と付き合う気もなかつた。今は男より絵に夢中だつた。

いつもジーンズにTシャツ。その上ノーメイクだ。だから、普通の女子大生みたいに化粧が濃いとか、

服装が派手だと批判を浴びたことは一度も無かつた。

男子生徒、女子生徒どちらにも人気があつたのだ。

弘子は、やつと掴んだ美大生の生活を、弘子なりに楽しんでいた。男と遊ぶつもりで入学したわけではない。勉強だけが望みだつたのだ。

絵が描ければそれだけで幸せだつた。

1章（1）

1章（1）

ところが、絵だけに集中する訳にはいかなかつた。

同じデッサンの学ぶ友達に無理やり誘われ、パーティーに出席したのだ。

しかも友人に無理やり派手なドレスを着せられての出席だつた。その友達は、ただ単に、自慢目的のために弘子を連れだしたのだ。何故ならば、弘子は皆に人気があるくせに、有志の集まりなどには顔を出したことはない。

誰が誘つても断り続けていたのだ。皆が酒を飲み、男とおしゃべりしている時間も、

弘子は一人、黙々と絵の制作に没頭していた。弘子は絵が好きだつた。

子供の頃から見るのも描くのも好きだつた。弘子の実家は旧家でも指折りの資産家で、家も広く廊下など、至る所に絵画が飾つてあつた。

その中でも一番のお気に入りは、弘子が幼い頃に病死した母の肖像画で、楽しい出来事や、

悲しい出来事全てを、絵の中の母に報告していたのだ。

その母は、今にも踊りだしそうなほど、躍动感に満ち溢れていた。そして、自分もいつかこんな絵が描けるようなれたらいいなと、思つていたのだ。

弘子はパーティーを楽しんではいなかつた。

子供の頃は実家でも良くパーティーが開かれたが、弘子にしてみれば、疲れるだけの苦痛な時間でしかなかつた。社交ダンスは父に教わつた。

厳しい父だがダンスの時だけは、優しく弘子をリードしてくれたが、他のお客様とのダンスは好きになれなかつた。汗ばむ手で触られ、酒臭い息を嗅ぐと目眩すら覚えた。いまだに踊りは嫌いな上に、お酒も飲めないのである。

しかし、ただ座つて退屈そうにする弘子でも、幼い時からのパーティーマナーは身体に染み付き、注目を集めないどころか、

羨望の眼差しを集めていた。

背筋はしゃんとして伸び、僅かに斜に構え、片足の踵を少し後ろに引く感じで、足をそろえて座る。手は力を抜き、太もも辺りに重ねて静かに置いておく。

完璧なのだ。弘子は意識してやつてはいる訳ではない。父に教わり、長い月日に培われた教養なのだ。

しかし、それを冷ややかな眼差しで見る目もあつた。

弘子を連れ出した友人は、注目を浴びる弘子に嫉妬し始め、飲めないお酒を、

無理やり弘子に飲ませた。そのうち弘子は気分が悪くなり、意識を失つた。

弘子が目覚めたのは、見知らぬ部屋のベッドの上だつた。そこには三人の男いたが、皆裸だつた。見た顔ではない。慌てた弘子は、自分も裸なのに気が付き驚愕した。

男たちは微かな笑いを浮かべていた。男の股間には弘子が初めて見るものが、

脈を打つてそり立つていた。まだ酒の影響が残つているのか、弘子は思うように動けなかつた。頭も割れそうに痛い。シーツで身體を隠すのが、

せめてもの抵抗だつたが、三人の男にしてみれば、そんなシーツなど何の役にも立たなかつた。かえつて興奮させただけだつた。

声を出す間もなくシーツをはがされ、一人の男が押し掛かってきた。二人は弘子の手足を押さえ、不気味笑っていた。男の息が弘子の耳にかかるつた。

激しい息使いは弘子の胸を圧迫した。そして、無理やり開かれた足の間に、

男の下半身が分け入った。おそらく男根であろう物が、弘子の秘部に押し当てられたが、

弘子にはどうすることも出来なかつた。ぐつと目を瞑つたが、涙は止まらなかつた。

その時すつと、胸の圧迫感が取り除かれた。

見ると、押し掛けっていた男が、手足をバタつかせ、後ずさりしていた。

何が起こつたのか咄嗟には判断できなかつた。

しかしその瞬間、その男が投げ飛ばされたのを見て、弘子は全てを悟つた。

誰かが助けてくれたと。それが雄一との出会いだつた。

残る二人は、雄一を見ると慌てて逃げて行つた。

雄一は一年先輩で、パーティーの主催者グループの一人だつた。

弘子のように目立つ存在ではないが、同学年の女子生徒には、それなりに人気の有る生徒だつた。それ以来、弘子の目は雄一を追い始めた。

今まで男の子にトキメキなど感じたことのない弘子だが、なれない化粧もするようになり、少々派手な服も、友達から借りるようになつた。全ては雄一の関心を引くためだつた。

パーティーに誘つた友だちは絶交した。弘子を犯す計画も、

全て友達と思っていた女の策略だつた。やがてその女は、周囲の非難を一身に受け、

自主的に退学していつた。弘子は改めて自分の無知さを知り、勉強だけでは世間を渡れないと判断した。

と、同時に雄一に深く好意を寄せる自分に気が付いた。單なるトキ

メキではない。

弘子にとつては初めての恋だった。

弘子は恋を実らせるために、あらゆる努力を重ねた。純朴なのである。

よく言えば一途。悪く言えば猪突猛進なのだ。ところが、元々美人だった弘子は、

少しの努力でたちまち蝶へと変身した。皆からは高値の華に位置づけられた。

何ものも寄せ付けない気品さえ漂っていたのだ。学園のアイドル的存在となつた弘子には、

言い寄る男はいなかつた。いや、言い寄せなかつた。それほど警備が厳重だつたのだ。

弘子の知らないところで、親衛隊が発足し、弘子を守つていたのである。

弘子は自分に魅力がないと勘違いしていた。雄二の視線を感じるが、弘子が見ると慌てて視線をずらすのだ。無様な姿を見られ、弘子は雄二に軽蔑されていくと思い込んだ。

とうとうある夜、弘子は雄二のアパートに押しかけた。

嫌われていたとしても、自分の気持ちだけは、雄二に伝えておきたかったのだ。

弘子はその時、初めて雄二の気持ちを知り、親衛隊の存在も知られた。

その夜、弘子は全てを雄二に捧げた。

初めての恋が実つた、弘子には忘れることの出来ない夜となつた。やがて学園内でも雄二とのことが噂となり、弘子はアイドルの座を引きずり下ろされた。

元々弘子が望んだことではない。かえつて清々とした気分だつた。

普通の大学生に戻り、恋に、勉学にと青春を謳歌していた。雄二との仲も順調に見えた。

1章（2）

ところが、交際を始めて半年もしない内に、雄一は弘子を持って余し始めた。

美人な上に頭がよく、真っ直ぐに自分に向き合つた女に、雄一は恐怖すら抱くようになった。

弘子の一途な性格が、仇となつたのだ。どんな時でも、弘子は相手の目を見て話す。

愛を囁く時も、些細な喧嘩のときも、じつと相手を見ながら話のだ。その目が雄一には我慢できなかつた。

愛を語る時には強要を、喧嘩の時には謝罪を求めるよつて見えたのだ。

やがて雄一は浮氣を始めた。気の置けない楽な女との情事を楽しんだ。

弘子とのセックスに不満があるわけではない。問題はその前後にあつた。

何度も『愛していろわ』と聞かされると、雄一の気持ちが萎えてしまうのだ。

雄一は、快樂だけを求める女を好んで選び、単なるはけ口にしていた。

ところがそれはけ口が、弘子への不満のはけ口に変わり、弘子の悪口を言い始めた。

学園のアイドルから一転、怖い女になつたのだ。しかもそれは、愛する雄一が広めたのだ。

雄一は浮氣する度に「弘子は怖い」と繰り返していた。

その噂が弘子の耳に入るには、さほど長い時間はからなかつた。

弘子はショックのあまりに寝込んでしまつた。弘子の休学は長期に

及んだ。

一ヶ月もすると、さすがに責任を感じたのか、何度も雄一が訪ねてきた。

しかし、弘子は雄一と会わなかつた。

自分を傷つけ浮氣した挙句、悪口まで広げた雄一が許せなかつた。深い愛情は深い憎しみと変わつていたのだ。

雄一は冷たく突き放されたことによつて、よつやく本当に愛しているのは弘子だと気づいた。しかし、時は既に遅すぎた。弘子の憎しみは消えることは無く、泣き続けたベッドの中で、更なる激しい憎悪となつていていたのだ。何事に対しても一途なのだ。とうとうある夜に、雄一は弘子の部屋に忍び込んだ。

何度も訪れ、知り尽くしたアパートだつた。

弘子の部屋は二階だが、薦の絡まる外壁は、雄一には造作も無く這い登ることが出来た。

窓はいつものように、僅かに開いていた。眠る弘子を雄一は黙つてみていた。

あどけなさは残るが、その美しい寝顔に、雄一は戸惑つた。

「ごめん」

小さく呟いたが弘子は目を覚まさなかつた。雄一は忍び込んだことを後悔した。

弘子とはちゃんと話をしたかったのだ。

気付かれないうちに帰ろうと思い、雄一が踵を返したとき、キャンバスの三脚につまずき、

弘子の描きかけの絵を倒してしまつたのだ。物音に気が付き、弘子は目覚めた。

そして部屋に男がいるのに気が付いた。一瞬でパーティーの日の悪夢が、

弘子の脳裏に蘇つた。弘子も雄一だとは思つてもいなかつた。そして大声を上げたのだ。

雄一は慌てて弘子に馬乗りになり、口を塞いだ。

「待つて。俺だよ、俺」

暗がりに眼が慣れた弘子の目に、雄一の顔が浮かび上がった。

「声、出さない？」

弘子は頷いた。雄一は安心したように、ゆっくりと弘子の口から手を離した。

「何しているの」

しかし、弘子の怒りは収まらなかつた。

「ごめん、話がしたかった」

照れくさそうな雄一の態度に、弘子は何の魅力も感じなくなつていた。

「こんな夜中に？冗談じゃないわ。散々私を馬鹿にしたのに、今さら何を話すの？」

弘子の怒りは、自分にも向けられた。こんな男に全てを捧げたのかと思うと、

口惜しさが次から次へと湧き起つてきた。

「俺が馬鹿だつた。弘子。愛しているのはお前だけだ。許してくれ」雄一の言葉は、遠い空の彼方へ消えて行つた。それほど、信じられなくなつていた。

「雄一への愛はもうなくなつたわ。あるのは憎しみだけよ」

弘子はきつぱりと答えた。

「そんなこと言わずに、許してくれよ」

すがり付くような雄一の態度は、弘子の怒りのバロメータを、一気に最高点にまで押し上げた。

「もう帰つて。一度と顔も見たくないわ。私には近づかないで」

弘子の捨て台詞に、雄一の怒りも爆発した。

わなわなと震えだし、なにやら眩いていたと思つたら、いきなり叫んだ。

「ちきしじう」

「雄一は台所に走ると、包丁を持ち出した。その後、雄一が何を言ったのか、

自分が何を叫んだのか、弘子には記憶がなかつた。そして気づいた時には、

弘子は血を流し苦しみもがいていた。首筋から暖かい液体が流れ出し、

弘子の胸を真赤に染めた。息も出来ない。弘子の喉は、「じほ、じほ」と音を立てるだけだ。

雄一の振り回した包丁が、弘子の首を直撃したのだ。

雄一は恐ろしさのあまり窓から逃げ出した。逃げ出す雄一の後姿を見た後は、

弘子は自分の屍をぼんやりと上窓から見つめていた。妙に客観的に思えた。

夢のように……。やがて弘子は完全に意識を失った。

翌日、弘子が意識を取り戻したのは、講義の最中だった。

いつ大学に来たのかさえ、弘子は覚えていなかつた。長く休んだせいもあり、

皆よそよしかつた。誰一人として弘子に話しかけないのである。講義の後に話しかけても、返事すらしてもらえなかつた。

一番仲の良かつた美子までもが、弘子を無視した。

その理由が分かつたのは、その日最後の講義が終了したときだつた。無視はされてもなんとなく皆から離れなれなかつた弘子の耳に、ざわめきと共に驚愕の声が響いた。

「うそー、弘子死んだの？」

「今警察が来ているわ、雄一が呼ばれたみたい」

恵美の知らせに、いきなり美子は泣き出した。

「弘子！どうしてよ。どうして死んだの？」

恵美は泣き崩れる美子を、しつかりと抱きかかえていた。

そんな光景を見ながらも、弘子には自分の事だと思えなかつた。

「弘子って誰よ？私？だって私はここにいるじゃない」

その弘子の声は、誰にも届いてはいなかつた。

「うそー！うそよーでたらめよ！」

何度も弘子が叫んでも、振り返る者をえいなかつた。

2章（1）

その時弘子は突然、昨夜の出来事を思い出した。雄一がアパートに忍び込み、

口論の拳銃包丁を取り出し振りますうちに私を刺した。

弘子は自分の屍を見つめる姿まで、鮮明に思い出した。

弘子が夢だと思っていたことは、現実に起こっていたのだ。

次の瞬間、弘子はアパートに戻っていた。

アパートには多くの警官が詰めかけ、現場検証の最中だった。

ベッドの脇にはシーツを被つて誰かが寝ていた。

しかし、そのシーツは真赤に染まっていたのだ。

シーツの下から突き出た足は、見慣れた弘子の足だった。

「あれが私？わたしなの？」

弘子は思わず近くの警官に訪ねた。

「ねえ、答えて」

腕を掴もうとした弘子の手は、無情にも警官をするりと通り抜けた。

弘子は呆然と自分の手を見つめた。その手は白く発光し微かに透けて見えていた。

実体など微塵も感じられなかつた。

「どう、これで分かつた？」

不意に見慣れぬ女性が隣に現れた。

その女性は光輝いているようにも見え、発する光はとても柔らかく暖かく感じた。

「貴方は誰？」

弘子は咄嗟に尋ねた。

「貴方の遠い親戚。そんな所かしら」

それから弘子に向かい話を続けた。弘子は訳が分からずに黙つて聞いていた。

「昨夜のことは覚えているの？」

弘子は頷いた。

「その後のことは？」

「その後？」

「そう、私はこれで一度目なのよ

「えつ」

「覚えてないのね」

弘子は頷くしかなかった。事実、何も覚えていないのである。

「私は貴方を迎えて来たの」

「迎えに？」

弘子には話の意味が見えなかつた。

「天国への道案内よ」

弘子は、その時初めてその女性に小さな羽根が生えていることに気が付いた。

「じゃあ、天使なの」

「分かりやすく言えば、そうね。でも貴方は一緒に行きたがらなかつたの。

まだ理解してなかつたのね

その理解とは、自分が死んだと言つ事だと、弘子は思つた。

しかし、驚きも恐怖も無かつた。

何故かは分からぬが、この女性と話していると、心が休まるのだ。

「だから、貴方を大学に行かせたのよ」

「私に理解させる為？」

「そうよ、残念だけど。貴方は死んだの、ここにいってはいけないわ

その顔は笑つてはいるが、目は悲しみに溢れていた。

「何故、ここにいっては駄目なの」

「もうここは、貴方の居場所ではないから。ね、一緒に行きましょ

う

弘子はシーツに包まつた自分を見つめ、頷くしかなかつた。

その時は、一緒に行かなくては駄目だと思ったのだ。

「一つだけ質問してもいいですか

ただ、気がかりなことは残つた。

「もちろんいいわよ」

「雄一はどうなるの」

弘子は雄一が罪を償い、更生することを願つたのだ。

「答えを聞きたい？」

「聞きたいわ」

「ショックを受けるかもよ」

女性の目の悲しみは色濃くなつた。でも、どうしても聞きたかった。こんなことになってしまったが、今では雄一に恨みもなく、雄一の今後が心配だつたのだ。

「それでも聞きたいの」

弘子の答えに、女性はしばらく考えてから答えた。

「彼は釈放されるわ」

「何故？」

弘子は驚いた。人を殺してお咎めを受けないことが有り得ない。そう思つたからだつた。

「アリバイがあつたの。もちろん嘘だけね。彼の浮氣相手が口裏を合わせ、

証拠不十分で釈放されるの」

「嘘よ！ 彼は正直に答えないの？」

弘子には、女性の言葉が信じられなかつた。

「答えないわ。『知らない』の一点張りで、警察も困つていたわ、でも決めての証拠が無いの」

「だつて包丁を持っていたのは彼よ」

「そうね。でも貴方たちが付き合つていたのは皆知つているわ。彼は貴方の部屋で、

料理を作つたと言つてゐるの、だから指紋があつても可笑しくない、とね。

しかも、貴方の悪口を広めたことも認めた上で、何故、今更殺す必要がある、

と逆に警察を攻めるわ」

弘子は啞然とした。殺された後にもここまで馬鹿にされるとは……。

穏やかだった弘子の顔が徐々に変わり始めた。

「それで彼は釈放されるのね。何食わぬ顔で」

弘子の顔は夜叉に変貌していた。髪は逆立ち、目は吊り上り、瞳は怒りに燃えていた。

「だから話したくなかったの。もう一緒にには行けないみたいね」

悲しそうな目は、今では女性の顔の隅々まで広がつていつた。

「ごめんなさい。でも、雄一は許せない。絶対に許せない」

「いえ、私には分かつていたわ、裁くのは貴方だつて」

そして一人の男を弘子に紹介した。

見るからに不気味な男は、いつの間にか弘子の後ろに立っていた。頭からフードをすっぽりと被り、顔は見えぬが目だけは、暗闇の中で金色に光り、

じつと弘子を見つめていた。

「ここにいる間は、彼が色々と教えてくれるわ。ここは特別な世界なの。

人間界にも靈界にも接する場所なの。同時に特別な力を持つてる場所でもあるわ。

彼が全て教えてくれる。後は貴方が無事に使命を果たし、靈界に、そして私の元に来ることを願つて待つわ」

そして女性は音もなく消えて行つた。残された男は、邪悪な存在その者だった。

「まずは様々な能力を身に付けないと駄目だ。今のお前では彼に指一本触れることがすら、

出来ない。このままでは復習は成し遂げられないのだ」

邪悪な存在だと分かっていても、今の弘子も邪悪な存在だった。恨みを晴らす悪霊である。

美しかった弘子の顔は、この時から邪悪な悪霊の顔へと変貌した。

弘子はまず、物に触ることから教えられた。コップを持ち上げたり、

ドアを開けたりするためには重要な能力だ。これが出来なければ、復讐は諦めるとまで言われたが、元々一途。悪く言って猪突猛進の弘子には、

思いのほかたやすく感じられた。はじめは何を掴もうとしても、手がすり抜けるのだが、あつという間にコップを持ち上げ、壁に投げつけ割ることが出来るようになった。

「優秀だな」

邪悪な存在は弘子の上達ぶりに感心した。怨念や執着心、復讐心が強いほど、

上達は早いらしい。

「その調子でどんどん行くぞ」

やがて弘子は、様々な能力を会得していった。人に憑依する術。一瞬で移動する術。

夢に入り込む術など、人間を恐怖に陥れる様々な術を身に付けて行つた。

そして、雄一への復習の機会を虎視眈々と窺っていた。雄一は生きた人間である。

いくら弘子が色々な能力をマスターしても、簡単にはいかない。実体のない靈魂だからだ。

遂行するには綿密な計画が必要だった。しかし、邪悪な存在は、手助けしない。

個人の復讐には、手出ししないそうだ。もしも邪悪な存在に助けを求める、

邪悪な存在が手をかせば、弘子は一度と天界には入れなくなる。そうなれば、行き着く先は地獄しかない。

人間界と靈界の狭間、そのまた狭間の暗い底に叩き落とされるのだ。そうなれば、生まれ変わりも一度とはない。

永遠に暗闇を彷徨い続け、完全に邪悪な存在となるのだ。

弘子は自分の力だけで復讐することにした。

復讐のためにはどんな犠牲も厭わないと思っていたが、

どうしても迎えに来た女性ともう一度会いたかったのだ。

その為には、一人で復讐しなければならない。弘子は綿密な計画を立案した。

しかし、計画実行には協力者が必要だった。しかも生きた人間の協力者が……。

2章（2）

美奈子は正直なところ恐怖を感じていた。

雄一は相変わらず私に乗ると、自分勝手に果てるだけだったが、そんな時いつも何者かの視線を感じるのだ。

「ねえ、雄一。私、なんだか怖いの」

早々に背中を向ける雄一に、美奈子は話しかけた。

「何が」

雄一は煙草に火をつけ答えた。

「なんだか分からぬけど、誰かに見られているように感じるのよ」「気のせいさ。周りを見ろよ。誰もいないよ。もしかしたらあのポスターかもね」

雄一はロックバンドのポスターを指差した。

「もう、からかって」

弘子の死からは既に半年が過ぎていた。雄一も美奈子もその事を忘れていた。

と言つよりも必死に忘れようと努力したのだ。

はじめは雄一も、何度も弘子の夢にうなされ目を覚ました。

美奈子も嘘の証言の後、悪夢に悩まされていた。

しかし、一ヶ月、二ヶ月と過ぎるうちに、罪の意識は薄れ、

悪夢に悩まされることはなくなった。ところが、美奈子は最近またうなされ始め、

目に見えぬ何者かに恐怖を感じていた。

雄一と一緒にいると、その気配は強まり、見つめられているようを感じるのだ。

事件の後、雄一は自主的に退学した。弘子の友人たちから常に白い目で見られ、学園内でも不穏な噂が流れ、とても大学を続ける勇気は、持ち合わせていかなかった。

今は建設現場で働く作業員である。

美奈子も雄一に続くように退学し、ホステスとして水商売の道に入った。荒れた生活である。勤務時間の違いから、一人の時間は限られた。しかし、喧嘩が絶えなくなつても、

共通の秘密を持つ二人は、決して離れようとはしなかつた。

雄一は帰宅すると、直ぐに美奈子を抱いた。美奈子はこれから仕事に行くのだ。

その僅かな時間が、二人の唯一の時間だつた。

美奈子は簡単に下半身だけにシャワーをかけ、雄一の匂いを消した。雄一はインスタントラーメンを食べながら、テレビを見ている。

美奈子は化粧をしながら雄一に尋ねた。

「今日は迎えに来てくれるの」

「駄目だ、明日は早い。明日は現場が遠い。五時には家を出なきや」

美奈子の仕事は一時までだ。翌日が休日や、出勤時間が遅いとき、

雄一はまめに美奈子を迎えて行った。

「分かった。タクシーで帰つてくるわね」

そう言つて美奈子は店に向かつた。雄一はラーメンを食べ終わると、うとうと眠りに付いた。美奈子の店は繁盛していた。俗に言つぽんクキヤバレーで、美奈子は人気者だった。

店の中では一番若く、スタイルがいいのである。指名に次ぐ氏名で美奈子は、

毎日くたくたに疲れていた。今日は世間一般では給料日に当たる。店はいつもに増して繁盛していた。十一時を過ぎた頃には、美奈子の指名も既に十五本を越えていた。普段の倍近い指名だ。口は疲れしまりもなく、手の自由も利かなくなつていた。店長は仕方なく美奈子の早退を認めた。この後の時間は、比較的お客様も減るからだつた。

普段は同僚と一緒に帰る美奈子も今日は一人タクシーを待つていた。しかし、タクシー乗り場は長蛇の列で、なかなか美奈子の順番にはならなかつた。

今日は二十五日。タクシーもかき入れ時だ。美奈子はめまいがしてきた。

かなり疲労が溜まつていたようだ。目に見えぬ恐怖に慄き、疲れぬ日も多かつた。

それでも必死に頑張り、家路に着いつとタクシーの列に並んでいたが、

とうとう、美奈子は意識を失いその場で倒れた。

覚えているのは、誰かに名前を呼ばれたことだつた。

その後美奈子は病院のベッドで意識を取り戻した。

ベッドの周りのカーテンと、消毒液の匂いが、ここが病院であることを美奈子に教えていた。まだあたりは真っ暗だ。ベッドサイドのテーブルには、美奈子の腕時計が置かれていた。

三時五分。まだ意識ははつきりしない。美奈子は思った。

あれから三時間も経つていなか、と。

誰か親切な人が、救急車を呼んでくれたに違いないと思つていた。美奈子は、自分の腕時計をもう一度、目だけで見てから、また眠りに付いた。

翌朝、美奈子は看護士に起こされた。

日は既に昇つていたが、起こされるまで気が付かなかつた。看護士は無愛想だ。

挨拶もなく美奈子の脈を取り始めた。

「今、先生が来ますから」

それだけを伝えると、看護士は病室を出て行つた。美奈子はその時初めて気が付いた。

体の自由が利かないのだ。よっぽど疲れているのかと思ったが、そうではなかつた。

美奈子は拘束されていた。手足を縛られ、ベッドに固定されていたのだ。

「ちょ、ちょっと、どうこうこと」

美奈子にはなにが起きているのか理解出来なかつた。自分はタクシ

一乗り場で気を失つた。

そして気が付いたときには、病院のベッドの上だつた。

どうして、縛られなければいけないの？美奈子は理解に苦しんだ。ベッドサイドに美奈子の時計はある。

しかし、日付を見たとき、美奈子の混乱は極みに達した。

時計の日付は、二十八になつていた。うそよー昨日は二十五よ！美奈子は叫びたかったが、

声は出ない。その時、口かせがあることにも気が付いた。頭は完全にパニックに陥つていた。担当医が姿を現したとき、美奈子は混乱により意識を失つていた。

「・・・さん。・・・さん、聞こえますか」

美奈子を呼ぶ声に目を開けると、医師が美奈子の顔を覗き込んでいた。

「いいですか、今、口かせと外しますから、騒がないでください。

騒げば、

また口かせですよ。分かりましたか

美奈子は目を見開きしきりに頷いた。

「じゃあ、外します」

医師が口かせを外したとき、パニック状態の美奈子はつい叫んでしまつた。

「なんですよ。これはなによ。こにはどこよ」

医師は幻滅した様に、またも口かせをはじめよつとした。美奈子は慌てた。

口かせをされたら話が出来ない。話が出来なければ状況が分からない。

美奈子は必死に首を振り、叫んだ。

「分かつたわ。静かにする。だからそれを着けないで」

医師の手が止まつた。

「本當ですね。だつたら頷くだけにしてください」

美奈子は言われたままに頷いた。医師は口かせを移動式診療テーブ

ルに置いた。

「落ち着きましたか？」

美奈子を覗き込み医師は尋ねた。美奈子は頷いた。

「よろしい。では何故ここにいるか理解できますか？」

美奈子は首を振った。

「何があつたか覚えていらっしゃるですか？」

またも美奈子は首を振るだけだった。

「では、話して結構です」

医師に言われ、美奈子は恐る恐る聞いた。

「何故、拘束までそれでいるのですか？」

「貴方はすごい錯乱状態でした。手が付けられないほどの錯乱で、安全の処置として拘束しました。しかも、狂ったように叫びっぱなしでした。

覚えていらっしゃるですか？」

「全然記憶にないの」

美奈子は泣きそうになってしまった。

「今日は何日ですか？」

更に美奈子は尋ねた。

「二十八日ですよ」

美奈子は答えを聞いて、泣き出した。

「嘘よ！ 今日は一十六日でしょう。ねえ、そう答えて。お願いだから……」

「今日は二十八日です」

医師は冷たく言い放った。

「だって、私は一十五日にタクシー乗り場で気を失つたのよ。昨日のことだわ。

今日が二十八日のわけはないでしょう」

「貴方はタクシー乗り場から運ばれたのではありませんよ。警官が連れてきたのです」

「警官？ 何故警官なの？」 しばらく

「警察病院です」

「えつ」

「貴方は一緒に暮していた男を殺害し、錯乱状態でここに運ばれてきたのです」

担当はカルテを見ながら付け加えた。

「一十七日、午後九時収容、……」

美奈子にその先は聞こえなかつた。私が雄一を殺した？ いつ？ 一十七日？

嘘よ！ 嘘にきまつてゐるわ！

だつて今日は一十六日よ……。混乱の極みに達し、美奈子はまたも意識を失つた。

美奈子が目覚めると、一人の警官が病室の椅子に座つていた。美奈子が目覚めたのに気づくと、病室を出て行つた。その間美奈子は、警官の動きを、

呆然と目で追うだけだつた。直ぐに私服警官が姿を現した。

「大丈夫ですか、分かりますか」

警官の質問にも、美奈子は何の反応も見せなかつた。目元は青く落ち窪み、

唇は真っ白に変色し、かさかさに乾いていた。目玉はしきりに動いていたが瞬きもしない。

私服の警官は首を振つて、落胆の色を顔に浮かべた。しかし、美奈子は必死に叫んでいたのだ。ただ、体は自分の物ではないように、

何の反応も起こさない。

「待つてよ、聞いて。これは間違いよ」

美奈子は病室を出て行こうとする警官を飛びとめたが、美奈子の体は、

静かに横たわるだけだつた。当然、声などは出ではいなかつた。

私の体は私の中ではなくなつた。

直感でそう思つたとき、美奈子の体に巣食つもう一人の存在が姿を

あらわし、
美奈子の全てを飲み込んだ。同時に美奈子の肉体も、全ての活動を
停止した。

3章（1）

一十五日十一時

雄一は久しぶりに夢を見た。弘子の夢だった。

しかもそれは異常なほど現実的で、みだらで卑猥な淫夢だった。夢の中の弘子は、この上なく美しかつた。

そして、裸の雄一にまたがり、全身をくまなく舐めていた。夢の中の雄一は、弘子のベッドに手足を固定されていた。そのベッドの周囲には、

沢山のキャンドルがともり、揺らめく光の中に弘子の裸体がきらめいていた。

弘子は食事中などにも、良くキャンドルを灯していたのだ。

しかし、光の中の弘子は、異様なほどに長い舌を持っていた。

その長い舌が雄一の男根に巻きつき、雄一にこの上も無い快感を与えていた。

全てを吸い取りそうな錯覚さえ覚えた。長い舌の異様な不気味さに驚きながらも、

雄一はその快感に身をゆだねるしかなかつた。やがて弘子は雄一の男根を自ら秘部に埋め、

激しく腰を動かし始めた。弘子の膣は激しくつねり、まるでいくつもの舌がまとわり付くように、雄一の男根を優しく、そして激しく愛撫した。

あまりの快感に、雄一は直ぐに果てた。ところが、雄一の男根は萎えるどころか、

益々いきり立ち、張り裂けんばかりに硬直していた。

弘子はなおも腰を動かし続け、雄一は何度自分が果てたのかさえ、分からなくなってきた。

萎えようにも、押し寄せる快感に逆らえず、下半身は別の生き物と

なっていた。

下から見上げる弘子は美しかつた。雄一はこのまま死んでも良いとさえ思ったのだ。

その時弘子の顔が変貌した。

「死んでもいいなら、殺してやるよ」

高笑いする弘子の顔は、この世のものではなかつた。

それでも、雄一は快感に身をゆだね続け、最後は気を失つた。

その時雄一は夢から醒めた。

全身から汗が噴出し、あろ「う」とか、パンツは大量の精液で汚れていた。

「いい年、して……」

雄一は情けなかつた。美奈子に放出したばかりか、

弘子の夢でこんなに大量に夢精するとは、雄一は自分に呆れ返つた。しかし、今思い出しても、快感といい感触といい、とても夢とは思えないほど現実的だつた。雄一はパンツを脱ぎ捨て、シャワーを浴びた。

美奈子が帰るまでにはまだ時間があつた。

シャワーを浴びながら、夢を思い出し、雄一は笑つた。

「しかし、弘子の顔、不気味だつたな」

頭にシャワーをかけ、シャンプーを始めた時、自分の男根が触られていることに気が付いた。

慌てて目の周りの泡を取り、目をこすりながら見下ろすと、美奈子が雄一の男根を、

いとおしそうに撫ぜていた。

「なんだ、帰ったのか。随分早いな」

美奈子は何も言わなかつた。

「おい、服がびしょびしょだぞ」

美奈子は尚も無言で、雄一の男根を摩り続けていた。

「まったく」

雄一が美奈子の脇に手を差し入れて、勢いよく立ち上がらせると、

それは美奈子の顔ではなかつた。

「ひ、弘子！」

「雄一は思わず叫んだ。だが弘子はただ笑うだけだった。

「そんな、まさか！死んだはずだ」

雄一は焦つた。現状を理解しようと思ったが、とても集中できない。目の前で殺したはずの弘子が笑つているのだ。

「これは、夢だ。これは夢だ」

雄一は念佛のように繰り返し、固く目を閉じた。しばらくしてからゆっくりと目を開けると、弘子はまだそこで笑つていた。

「どうしたの？」

弘子が口をきいた。その声は紛れもなく弘子の声だ。

雄一はゲンコツで自分の頭を何度も叩いた。

「夢だ！ありえない」

「雄一、何言つていいの？」

見ると弘子は裸で、体を洗つていた。二人が付き合つていた頃、愛し合つた後に一人で入浴した時と、まったく同じに見えた。しかもそこは、弘子のアパートの浴室そつくり。いや、弘子のアパートの浴室だった。

弘子の好みのシャンプーが置かれ、一人の揃いの歯ブラシも、プラスティックのコップに仲良く立つていた。

弘子は好んで子供用の練り歯磨きを使つていた。

『甘いから』との理由だが、その子供用の歯磨きまで、歯ブラシと一緒に立つていた。

雄一は訳が分からなかつた。

「風呂場で寝たら風邪ひくわよ」

それは以前の優しい弘子に間違いなかつた。弘子は一足先に風呂場から出て、

体を拭き始めた。美しい。雄一は心から思つた。しかし、雄一は理解しかねていた。

まだ、夢をみているのではと、思えずにいられなかつた。

「う、うん」

雄一が湯船から出ると、弘子がタオルを渡してくれた。

「今日は楽しかったね」

弘子が体を拭く雄一に話しかけた。

「えっ」

「もう、どうしたの？ 映画よ、面白かったわ」

弘子とは何度も映画を見に行つた。

「まだ、続きがありそうな終わり方だったわね。続編が出たらまた見たいわ」

雄一は会話の内容から、見に行つた映画を思い出した。

『エルム街の悪夢』そうだ。怖がりながらも弘子は真剣に見ていた。その後の食事中にも、何度も映画の話をする弘子を、はつきりと思ひ出した。

それは弘子の誕生日。

「ああ、続編が作られるかは、わからないけどね」

雄一は、今までのことが夢では、と思い始めた。弘子は死なずに元気に過ぐる、

自分とは仲良く付き合つていると。弘子が用意した寝巻きに着替え、食卓につくと、

おこしそうな料理が並んでいた。弘子は料理も得意だつた。早くに母を亡くし、悲しむ父のために料理を作りたいと、家政婦から教わつたのだと聞かされたことがあつた。食卓から食器に至るまで、

そこのあるものすべては、当時の弘子の部屋、そのものだつた。

「雄一、プレゼントありがと」

そこには、雄一が買った店の紙袋があつた。弘子の誕生日に、雄一が買ったプレゼント。

それはミッキーのぬいぐるみ。弘子の父は、ぬいぐるみとかには理解を示さず、

弘子の誕生日は、毎年洋服や勉強道具に限られていた。

事典やドレスは、子供の弘子を喜ばせた」とを一度もなかった。

そんな弘子がおねだりしたのは、ミシキーのぬいぐるみだった。

弘子は紙袋を引き寄せ、ミシキーのぬいぐるみを抱きしめた。

雄一はこれが現実だと感じ始めていた。いや、思いたかった。そう

思いたいほど、

ここは心地よく、弘子も優しかったのだ。

「ねえ、雄一も抱いてみて、気持ちいいよ」

弘子に差し出されたぬいぐるみを、雄一は照れくさそうに抱きかか

えようとした。

そしてその顔を見た時、雄一は恐怖のドン底に呑み落された。

「美奈子……」

「雄一、雄一大丈夫?」

雄一は美奈子に起こされ、目を覚ました。

「うなされてたわよ」

美奈子は出勤したときと同じ服装だった。

「・・・ああ、大丈夫だ。悪い夢を見たようだ。帰ったのか?」

雄一は起き上がり、自分の体を調べた。いつものパジャマだ。パンツも……汚れていない。

全てが夢だったのか?雄一は夢の内容を完全に覚えていた。リアルだ。リアルすぎる……。

「.....聞いている?」

美奈子は何か話していたようだ。

「あ、ああ、聞いているよ」

雄一が答えると、パジャマに着替えた美奈子が隣に座り、話を続けた。

「でね、疲れたから早めに上がったの、ちょっと罰金取られるけど、その分以上に稼いできたわ。ナンバーワンの私には、店長も逆らえないわね」

美奈子は笑っていたが、疲れた様子は隠し切れなかつた。

「もう寝ろよ。せっかく早退したんだから」

雄一が言うと、美奈子は首を振った。

「雄一が起きたの、久しぶりだもの、ねえ、また愛してくれる?」

美奈子はパジャマのボタンを外し始めた。目つきは普段の美奈子ではなかった。

今でも、そんな目つきを何度か見たことがある。ピンクキャバレーは客が楽しむだけだ。

サービス嬢にストレスが溜まつても可笑しくはない。雄一はそのことを理解し、

美奈子の求めにも出来るだけ答えてきた。しかし今日は、とてもそんな気にはなれなかつた。夢の記憶が生々しく残つていたからだ。

「駄目だ、朝早い。寝かせてくれ」

雄一の言葉は、美奈子には聞こえないようだつた。パジャマの上から撫ぜていた男根を、

いきなりズボンから引っ張り出し、美奈子は口にくわえた。

雄一は快感に身を仰け反らせた。夢の中では何度も果てたが、現実の雄一は思いのほか元気だつた。勢い良く持ち上げる鎌首に、美奈子の舌が絡んだ。

思わず声を出しそうになるが、雄一はかるうじて我慢した。

夢で得た快感も雄一の気持ちに拍車をかけたのか、雄一はあつとう間に昇天した。

美奈子は放出された全てを飲み込み、全裸になつて雄一の前に横たわつた。

ゆつくりと両足を開き、雄一に自分の秘部をさらけ出した。

雄一のペニスは既に復活を遂げていた。

激しく脈打ち、天井を見上げながら更なる爆発の時を待つていた。

雄一はゆつくりと美奈子に重なつた。雄一が押し入ると、美奈子は反射的に背中を反らせ、

快樂の世界に踏み入つた。雄一の動きが早くなり、美奈子は絶頂へと登りつめた。

雄一も同時に果てた。しかし、雄一は離れようとはしなかつた。

それどころか、美奈子の中で復活し始め、徐々に強度を高めていった。

美奈子の快感はまだ落ちきつてはいない。硬くなつた雄一のペニスが脈打つ度に、快樂の階段を一步一步上り、雄一が一度腰を引いただけで、一度目の絶頂に達した。

その後、何度達したか美奈子は覚えていなかつた。

雄一も自分が何度も放出したのか解らなかつた。

放出しても、放出しても一向に衰える様子はなく、快感だけを求める獣となっていた。

そんな二人が目覚めたのは、翌日、陽も傾きかけた時だった。

「仕事、休んじまつた」

煙草に手を伸ばし一本口にくわえたが、マッチが切れていた。

布団は一人の体液でベトベトだった。

「雄一どうしたの、タベは変だつたわ」

「美奈子、お前こそ可笑しかつたぞ」

「雄一に言われ、美奈子は笑つた。

「そうね、二人とも変だつたわね。でも最高の気分よ」

雄一はマッチを探しに立ち上がつた。足取りはおぼつかない。ふらふらするのだ。

そんな雄一を見て、美奈子はクスクスと笑つた。

「私もだるいわ、今日は休もうかしら」

雄一は答えなかつた。その日は、今しがたスイッチを入れたテレビに注がれていた。

「美奈子、見てみろ」

雄一に促され、美奈子はテレビを見た。雄一が指差したところは、ニュースキャスターの座る、テーブルだつた。

その日付は、二十七日、日曜日。美奈子も雄一も驚いた。丸々一日寝ていたことになる。

いや、寝たのは僅かで、丸一日ハメ狂つていたのかも知れない。どうも体の状況からすると、後者の方が確立は高そうだつた。

「ほんとう?信じられない」

美奈子も自分の目を疑つた。他のチャンネルに合わせると、良く見るアニメがやつていた。

確かに日曜の夕方、六時過ぎみたいだ。いきなり雄一が大声で笑い出した。

「いいじゃないか、こんなことがあつても」

呆気にとられていた美奈子も笑い出した。

「そうね、若いんだもの、一曰ぐらい何よ」

雄二は布団に戻り、美奈子を抱き寄せ、優しく話した。

「昨日の美奈子は最高だったよ」

「雄二も信じられないくらいに激しかったわ。でもとても幸せな気分」

美奈子も雄二に抱きついた。

「食事の後またどうだい？」

「雄二も好きね。でもそんな雄二も素敵よ」

二人は唇を重ねた。簡単な食事を済ます頃には、二人の興奮は既に高まっていた。

一人はずっと裸のままだった。食事の際も美奈子は雄二のペニスを摩り続け、

雄二は美奈子の乳房を愛撫していた。やがて箸を投げ捨て、二人は激しいキスを交わし、

体液で汚れたままの布団に飛び込んだ。絡み合ひ手と足。溶け合ひ肌と肌。

直ぐに絶頂の波が二人を飲み込んだ。しかし、果てることはない。永遠の快楽に飲み込まれていくようだった。しかし突然、雄二に異変が起きた。

苦しい。息が出来ない。そう思つたとき、美奈子が首を絞めているのに気がついた。

「や、やめろ」

搾り出した声は、美奈子には届かなかつた。

美奈子は馬乗りになり、激しく腰を動かし続けていた。

しかし、その手はしっかりと雄二の首に食い込んでいた。

雄二は美奈子の手を掴み、必死に除けようとしたが、異常な力の強さに、

外すことは出来なかつた。ところが、雄二はまたも絶頂を迎えるようとしていた。

首に食い込む手には、更なる力が加わつた。美奈子も絶頂を迎える

のか、

動きが激しさを増した。と同時に雄一も勢い良く放出した。

美奈子の動きが止まった。そして、仰け反った美奈子が顔を見せたとき、

雄一の心臓も止まつた。消え行く雄一の意識が最後に見たものは、雄一にまたがつた弘子の顔だつた。

その顔がかすかに笑つたように見えた時、雄一の意識はぱつつりと途切れ、

二度と陽の光を見るとはなかつた。

「終わつたな」

邪悪な存在が弘子に言つた。しかし、弘子は答えなかつた。

「迎えをよぶか？」

その問いにも、弘子は答えなかつた。弘子は、目を見開き息絶えた雄一の屍を、

じつと見下ろしていた。雄一の屍は、肉の殆どが削げ落ち、骨と皮に成り果てていた。

美奈子はそんな雄一に抱きついたまま、深い眠りに落ちていた。

弘子はじつと見ていたが、やがて髪の毛が逆立ち始め、邪悪な存在に振り向いた。

「まだ、終わつてはいない」

弘子の目は激しく燃え盛つていた。邪悪な存在は高笑いを上げた。

「いいぞ、お前の好きにするがいい。とことん恨みを晴らすまで、好きに暴れろ」

そして弘子の肩に手を置き、一言残して姿を消した。

弘子の恨みの矛先は、友人と思っていた、あのパーティーに誘つた女に向けられた。

不幸の始まりは、全てあの女の計略だと……。

弘子には、もう面倒な計画など立てる必要はなかつた。

あの女が息絶えるまで、苦しみを与え続けるだけだと思った。

しかし簡単に殺すことは考えなかつた。如何に長く苦しめられるかが、問題だつた。

雄一を無残な姿で殺した今、弘子には恐れるものはなかつた。

そして、邪悪な存在が最後に残した言葉を思い起こしていた。

『後はお前一人でやれ、お前は俺より邪悪な存在だ。教えることは何もない』

弘子はここまで変われた自分に驚きもしたが、邪悪な心に支配された弘子には、

復讐は当然の行いだと思った。死して報いを受けるのだと……。

弘子は人間界と靈界の狭間で生きることを自ら選んだのだ。

弘子は自分のアパートに舞い戻つた。部屋はそのままだ。誰も借りてはいない。

全ての復讐はここから始めるのだと自分に言い聞かせ、

邪魔な人間を徹底的に苦しめると固く誓つた。アパートも弘子を受け入れた。

壁の彫刻は不気味に盛り上がり、アパート全体に蔓が巻き付き、さながらアパート全体が、

一つの生き物のように変貌していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7961d/>

怨情

2010年10月9日07時42分発行